

私が考えること

越前市武生第二中学校 三年 川本一翠

職場体験で、母の職場の越前市役所を選んだ。色々な仕事がある中で、人権担当の部署に行かせていただいた。特に「LGBTQ」の制度を担当している方から、直接話を聞かせていただいた。私の年代は、当たり前前に身近にある言葉であるし、私自身、差別などの意思は持っていない。

そう、思っていた。そう、思い込んでいた。

越前市は、パートナーシップ制度に県内でいち早く取り組んでいることは、母からも聞いていた。この制度の運用の際には、市役所の内部でも、多くの部署が前向きに取り組むため協議がなされたと教えてもらっていた。とても、誇らしかったし、当然であると思っていた。そのことを母に話した。母は嬉しそうに話を聞いていたが、私に一つ質問した。

「パートナーシップ制度を利用する方が来る窓口はどこがいいと思う？」

私は、当然のこととして、人権の担当課であると答え

た。まだ偏見が残る中、婚姻届の窓口に来ることは当事者の方にとって負担に違いないから。専門部署で一括して担当して制度を利用していただくのがよいに違いない。そう自信を持って答えた。

答えはそうではなかった。

当事者の方が真に求めているのは、婚姻届の窓口で、同じく受付してもらうことだった。

私は何も分かっていなかった。

特別な取り扱いをすること自体が「差別」になりうること。まったく頭に浮ばなかった自分を心から恥ずかしいと思った。

母が、実は、同じように考えてしまっていたのだと教えてくれた。

制度を変えるには、法律や先例や色々なことを調べたとのことだった。越前市が先進的な取り組みをしているということとは、参考とする事例も少ない。その中でも、他の自治体や、国の制度や、変えられないものの中でも、少しでも前向きな変更ができないかを夜遅くまで協議したのだと教えてくれた。住民票の表記について、同性であっても戸籍上の婚姻と同じような補助制度が受けられないかなど、多くの分野で話し合いがなされたとのことだった。考えて、考えて、少しでもよくなるようにとの

気持ちには間違いがなかったはずである。しかし、母も私と同じ考えを持ち、人権担当課との協議の場で、自分の理解が全く遅れていることに心から落ち込み、当事者の気持ちに寄り添えない自分を責めたと言った。

自分の経験を思い出した。

私は特別なメガネをかけている。このメガネがないと生活ができない。三歳の頃から複数の病院に行き、特別な検査や訓練をして、今は少しずつ視力が回復している。メガネをかけても、〇・三ほどの視力しか出なかった頃、学校でメガネを外してみるように言われた。変じゃないよと言いながら、無理やりメガネを外された。そのせいで、レンズが取れてしまい、私は、その日一日中泣き続けた。小学校の低学年だった私の涙は、壊れたメガネに対する思いであり、無理やり引っ張られた際の耳の痛みであり、何より私のことを理解してもらえない悲しさだったと思う。当事者の想いを理解してもらうには大きなハードルがあることを思い知った出来事でもあった。

そもそも人権とは何だろう。「権利」は幅広く、全員が納得することはできないように思う。消極的な答えであるとしても思うけれど、自分の経験でも、全員に理解してもらうことは、ほぼ不可能に近いのではないかと正直思う。それでも人権とは何かを考えるとということ自

体が、人権を守る中心にあるということ、自分の発言が、行動が、正しくないかもしれないと立ち止まること、自分の考えが当たり前であると思い込まないこと。この考えを持ち、接することが、その人が、その人らしく暮らすことができ、そのことが、個人から、社会につながっていくのだということを自分の今の結論とした。

私の目がほぼ見えていないことを知った両親が私の為にしてくれていること、病院や保育園や学校での配慮、市役所を含めた援助、私がよりよく暮らせるようにとの「想い」のおかげで、当事者である私自身がそのことに改めて気が付くことができたからだ。

人権の「権」という漢字には、他を支配する力という意味があるが、「物事を行う資格」という意味もある。

権利は、主張するだけでなく、主張することができ知識と、相手を理解する想いを持ってこそ、初めて、主張する資格が与えられるということなのだと思う。考えること、理解すること、それよりも、「考えようとすること」、「理解しようとすること」、この原点こそが、人権が守られる社会につながっていくのだと思う。私自身も、その社会の一員としての資格を持つことができるように、考えようとするをやめずにいこうと思う。